



第2回 ライプツィヒでの本拠定まる

3月終りにライプツィヒに来てから早くも2ヶ月がたとうとしている。あっというまだった気もするし、日本を離れたのがもうはるか遠い昔だったような気もする。5月1日には約1ヶ月滞在した大学のゲストハウスを出て新しい住居に引っ越した。市の中心部から少し北側にいった閑静な住宅街のなかの古いアパートの一室だ。60㎡だからけっこう広々している。古い建物なので天上がやたらに高い。台所とバス・トイレを除くと扇形になった部屋がひとつだけという作りで、外に面している扇形の弧が全部窓になっているのでたいへん明るい。出窓が小部屋になっているのが気に入っている。そこに置かれたテーブルでいつも食事をする。目の前には地元のミヒャエリス教会の尖塔がそびえ、その前は色とりどりの花が咲いている広場になっている。真下を市電が通っているのでややうるさいのが難だが、しばらくするとそれにも慣れてき

た。いよいよライプツィヒでの本拠も定まり本格的に勉強と仕事に取り組むときが来たのだと思う。

それにしても五月のドイツはほんとうによい季節だ。ドイツの五月という思い出すのは、シューマンの歌曲集『詩人の恋』の第一曲「美しい五月に」である。シューマンがハイネの詩にもとづいて作曲したこの曲には、ドイツ人が五月という季節に寄せる心情があふれるばかりの抒情性とともにも伝わってくる。ちょっと歌詞を見てみよう。(次頁へ)

Im wunderschönen Monat Mai

Heinrich Heine

Im wunderschönen Monat Mai,
als alle Knospen sprangen,
da ist in meinem Herzen
die Liebe aufgegangen.

美しい五月に
花という花のつぼみが開きはじめたとき、
わたしのこころのなかでも
愛が花開いた。

Im wunderschönen Monat Mai,
als alle Vögel sangen,
da hab' ich ihr gestanden
mein Sehnen und Verlangen.

美しい五月に
鳥たちがみな歌い始めたとき、
わたしは彼女に向かって告白した、
わたしのあこがれと願いを。

『詩人の恋』は、ちょうど30歳になったシューマンが妻となるクララとの熱烈な恋愛のさなかに作曲した歌曲集で、詩人の遂げられなかった恋が描かれているとはいえ、全篇にあふれているのはクララとの恋のさなかにいるシューマンの憧憬と夢想到満ちた熱いおもいである。ところで「美しい五月に」と訳してあるが、見ての通り原詩には「美しい schön」に「wunder」という言葉がついている。この言葉は「驚くべき」とか「奇跡のような」という意味である。五月の美しさは、ただ「美しい」と形容するだけではとうてい表わしきれない「奇跡のような美しさ」なのである。緯度の高いドイツには日本の春にあたる季節がほとんど存在しない。今年もそうだったが、四月でも雪が降るような寒い日がたまにあ

る。それが五月になると突然光があふれ出し、木々の花がいつせいに咲き始め、空気がそうした花の香りでむせかえるようになる。今まで家のなかに閉じこもっていた人たちが町へと出てくる。カフェやレストランが店前の路上にテーブルを出してくるので、さわやかな空気の下でお茶や食事を楽しむことが出来るようになる。そんなときのビールの味は格別である。今年のライブツィヒは五月にはいっても天候がやや不順でなかなか本格的な「美しい五月」が始まらずやきもきさせたが、どうやら完全に「美しい五月」が始まったようである。この季節のいちばんの楽しみはなんといってもシュパルゲル、白アスパラガスだ。店頭でこれが並び始めるとみな目の色を変える。レストランで食べると肉料理よりも高い。

ただゆでてソースをかけるだけだが冷えた白ワインがよくあう。ドイツ人のシュパルゲルへの反応はちょっと日本人の松茸への反応と似ている。ドイツ人は日本人以上に季節感を大切にするが、この五月のシュパルゲルなどはそうしたドイツ人の季節感の現われの代表的ケースといえるだろう。かえって日本のほうが季節感が薄れてきて寂しい気がする。

仕事のほうは、週一回大学で学生たちに日本語で戦後日本思想について話しをするのをのぞけば——けっこう授業の準備はたいへんだが——、日本から持ち越しのアドルノ『ヴァーグナー試論』の翻訳の最終的な仕上げが中心である。ほぼ完成に近づきつつあるが、アドルノ語とさえいわれるその難解極まりないドイツ語との格闘はもうちょっと続きそう。ただひとつ気づいたのは、日本で翻訳をしているときには一種抽象的な概念記号の日本語への置き換えのように感じられていた翻訳作業が、日常的にドイツ語の使われている環境のなかだと違う意味や性格を帯びてくることである。たとえばアドルノの友人でやはりすぐれた思想家・文人であったベンヤミンに『一方通行路』というタイトルのアフォリズム集がある。日本にいるときには、原語「Einbahnstraße(アインバーンシュトラッセ)」と日本語「一方通行路」とのあいだにはベンヤミンの本のタイトルという特別な条件のなかでの結びつきしか感じられな

った。だがドイツにいれば、当然ながら町のあちこちにこの道路標識を見る機会がある。そのときベンヤミンの本を思い出して一瞬ぎくつとするのだが、これは考えてみれば一種の倒錯である。いうまでもないが「一方通行路」という言葉は、具体的な道路標識を表わす言葉として使われるほうが一般的、日常的である。ベンヤミンの本のタイトルとしての使われ方はごく特殊なケースにすぎない。しかしわたしの頭の中ではこの特殊なケースのほうが先に思い浮かんでしまうのである。考えてみれば、この種の倒錯は日本で外国の文学や思想を研究するときには不可避免的に起こる現象である気がする。いわば上澄みとしての概念語や理念語を先に覚えて——「精神」を表わす「Geist(ガイスト)」など中学生の頃覚えた記憶がある——、そうした上澄みの底に沈殿している日常的な言語の世界をおろそかにしてしまうことは、外国研究者ならみな心当たりがあるだろうと思う。今ライブツィヒにいてドイツ語に関していうと、専門書を読むのがいちばん楽で、次が新聞や雑誌を読むこと、逆にいちばん難しいのはテレビや映画の台詞を聞き取ること、そして町中でごく普通に交わされる会話の内容を理解することである。小説でも、いわゆる「純文学」のほうが大衆小説よりも理解しやすい。母語としての日本語生活に置き換えて考えてみれば、こうした状況がいかに変かがおわかりいただけるだろうと思う。そう、ほんとうに難しいことがひとつあ

る。それはこどものドイツ語を理解することだ。これもとても象徴的だと思う。

こう見てゆくと、わたしたちのドイツ語理解には大きな歪みがあることがわかる。具体的にいうと、なにげなく使われるドイツ語が母語としての文脈において帯びている「語感」をわたしたちにはなかなかつかめないのだ。とくに辞書的には同じ意味でありながら違う言葉、いわゆる「シノニム」における語感の違いを理解するのは至難の業である。わたしは今自分の翻訳がこうした点で大きな間違いを犯していないかひどく気になっている。これはおそらく日本で同じ作業をしていても感じなかった懸念だろうと思う。同時にこの問題は異なる社会や文化を理解しようとするとき必ず突き当たるやっかいな問題ともいえよう。わたしは今ライブツィヒにいる自分の立場を通して、こうした倒錯を克服するにはどう

したらよいのかを考えてみたいと思っている。いや、考えるだけではない、ドイツ語を、そしてドイツの社会や文化を、日常的な「語感」の次元で捉えられるよう努力しなくてはいけないのだ。これはささやかだが大きな発見だったと思う。日本にいたときには分らなかったことだからだ。戦後日本におけるユニークな思索者のひとりだった森有正は、周知のようにパリ留学から帰国せず東大助教授の地位を捨てそのままパリに残りパリで生涯を終えた。おそらく森もまた日本にいたのでは分からない問題にパリでぶつかり、その問題を解くためにパリにそのままとどまったのだと思う。さてわたしは……。

高橋順一
(早稲田大学教授)